

美術の窓(156)

古書目録福袋と梅雪堂貞道

大和文華館館長 浅野秀剛

もう2か月以上前のことになるが、1月中旬に「古書目録福袋」と書かれたA4サイズの袋が届いた。開けてみると、16冊の古書目録が入っている。袋の表には「この福袋は、新型コロナウイルス感染症流行の影響により、1月の開催が見送りとなった「銀座古書の市」参加店有志から、古書愛する皆様への贈り物です。各店とも、「古書の市」のために蒐集した逸品を目録に掲載しております。」云々と記されている。16冊は大きさも体裁もまちまちで、「各店がそれぞれに趣向を凝らした目録」であり、カラフルで楽しいものになっていた。同時に2袋届いたので、福が2人分届いた気分になった。非常事態宣言下の重苦しい空気を一変してくれる素敵なプレゼントであった。

私は浮世絵や近世絵入版本を専門にしているので、古書目録・作品目録の類には昔から大変お世話になっている。友人のなかには毎週どこかの古書市や古書店に出かけ、何かしら購入するツワモノもいるが、私にそこまでの根気と資金はない。しかし、1975年の夏に東京に移住してからは、自然に神田神保町の古書店街に出かけ、毎年秋に開催される東京古典会主催の古典籍展観大入札会には、目録片手に下見に行くのが恒例になった。古典籍の多くは私個人ではとても買えな

いが、下見はただである。それが大変ありがたかった。

1975年の秋は、神田神保町の実書房が初めて浮世絵版画の販売目録を刊行した年でもある。「古書目録福袋」には、その実書房の「浮世絵・新版画目録」も入っていた。版書房の浮世絵版画目録の創刊号をあらためて手に取ると、横中本サイズ、今流にいうとB6横型本で、随分かわいらしい。古書の販売目録は明治からあり、浮世絵版画の入札目録も明治末には誕生しているが、オークションや入札会用ではない浮世絵版画の販売目録は実書房のものが嚆矢と思われる。その後、多くの浮世絵商、古書籍商が追随し、今では膨大な数の作品が目録に掲載されている。私(だけではないと思う)はその多大な恩恵を被って今日まで研究活動を継続できている。

カラーかモノクロか、あるいは図版の大きさにもよるが、浮世絵版画はサイズが小さいので、図版が載っていると、それから得られる情報は大変大きい。本物を実見するのに近いものを得ることができるので、とてもありがたい資料になる。信用のおける店だと複製が載っている可能性はまずないのもいい。これが絵画(肉筆画)だと、図版で鑑定することが困難なので、気になる作品はどうしても実見せざるを得ない。その

辺が決定的に違う。

そんなわけで、古書目録や入札会の下見会で得られた知見を二つ書き留めておこうと思う。主催者、発行者のなかには、買いたい私のような利用者を苦々しく思う人も少なくないであろうが、どうかご容赦願いたい。

一つは、吉原俄の番付である。吉原俄とは、江戸の遊廓、吉原において、芸者が俄狂言を演じながら吉原内を練り歩く8、9月の行事である。俄とはいっても、事前に練習したものを披露するもので、歌舞伎舞踊を中心とした演目を遊女屋あるいは町内でグループを結成して演じるのであるが、そのさまは山王祭や神田祭の附祭に似ていた。吉原俄が定着した安永5年(1776)からしばらくは冊子の番組(番付)が出されたが、まもなく一枚摺の番付に変わる。一枚摺の俄の番付が何時から刊行されたかは明らかでないが、遅くとも寛政3年(1791)には出されていたようである。しかし、30年前までは、現存する最も古いものは寛政7年のものといった状況であった。ところが、平成3年明治古典会七夕大入札会に寛政5年のものが出た。38点貼り込まれた「吉原関係刷物貼交帳」のなかに入っていたのである。私は下見会場に行き、入札会目録の余白に夢中でメモを取った。度胸がないのと後ろめたいのが混じって、三分の一くらいしかメモしなかったが、そのメモは今でも大切にしている。「通廓全盛番付 寛政五、九月十五日より二の替り」とあるので、その年は8月に前半が行われ、9月15日から後半が行われたことが判明するのである。その一枚摺は今どこにあるのだろうか。

二つ目は、梅雪堂貞道の墨摺絵である。京都・大坂の浮世絵、つまり上方浮世絵は肉筆画と版本の時代が長く続いた。一枚摺の版画の創始については、享保(1716~36)頃に長谷川光信のものが刊行されていた可能性が

あるが、確実なのは梅雪堂貞道の作品である。梅雪堂の作品は、黒田源次『上方絵一覧』(1929年)のなかで3点の役者絵と1点の風景画「京大仏八景」(中判墨摺筆彩)、それに『絵本四季もやう』1冊が紹介されていて、その後の考証で、役者絵が寛保2、3年(1742、43)の興行に基づくものと判明している。役者絵については、私も展覧会で見たことがあるが、風景画と絵本については図様すら把握していない。

そのような状況のなかで、2014年6月の「大阪古典会 古典籍善本展観図録」が送られてきて、なかに、梅雪堂の「京清水八景」(図1)が掲載されていた。下見に行って実見したところ、大判墨摺筆彩作品で、右下に「板元 寺玉・荒川」、左下に「大和絵師 梅雪堂」(印)貞道」と記されている。板元と絵師名の記載が「京大仏八景」と同じなので、もしかすると、同一のシリーズであり、とすれば「京大仏八景」も大判なのかもしれない、と思った。そうこうしているうちに、2年後の2016年7月、「阪急古書のまち古書目録」が送られてきて、なかに、「加茂葵御祭之絵図」(図2)が掲載されていた。やはり大判墨摺筆彩作品で、右下に「大和絵師梅雪堂」(印)板元洛東祇園萬屋仁右衛門」と記されている。こちらは実見していないが、間違いなく梅雪堂の珍品である。これらは今、誰の手に渡っているのだろうか。

その後、偶然に、立命館大学アート・リサーチセンターに「絵尽友あそび」という墨摺の絵本が所蔵されていることを知り、2018年秋に調査させていただいた。最終丁に「梅雪堂筆」と記されており、図様からも梅雪堂貞道と認定できるものである。この本はウェブで公開されているので、興味のある方はご覧いただきたい。

近年は、紙の目録とともに、ウェブ上の情報のお世話になることも増えた。これも時代の流れであろう。



図1 「大阪古典会 古典籍善本展観図録」2014年6月、より複写



図2 「阪急古書のまち古書目録」2016年7月、より複写

季刊 美のたより No.214

令和3年4月1日

発行 大和文華館